

目にすることができる江戸時代の史跡

(2001. 6. 22.)

I 村の姿

(1) 東大和市域を構成した江戸時代の村

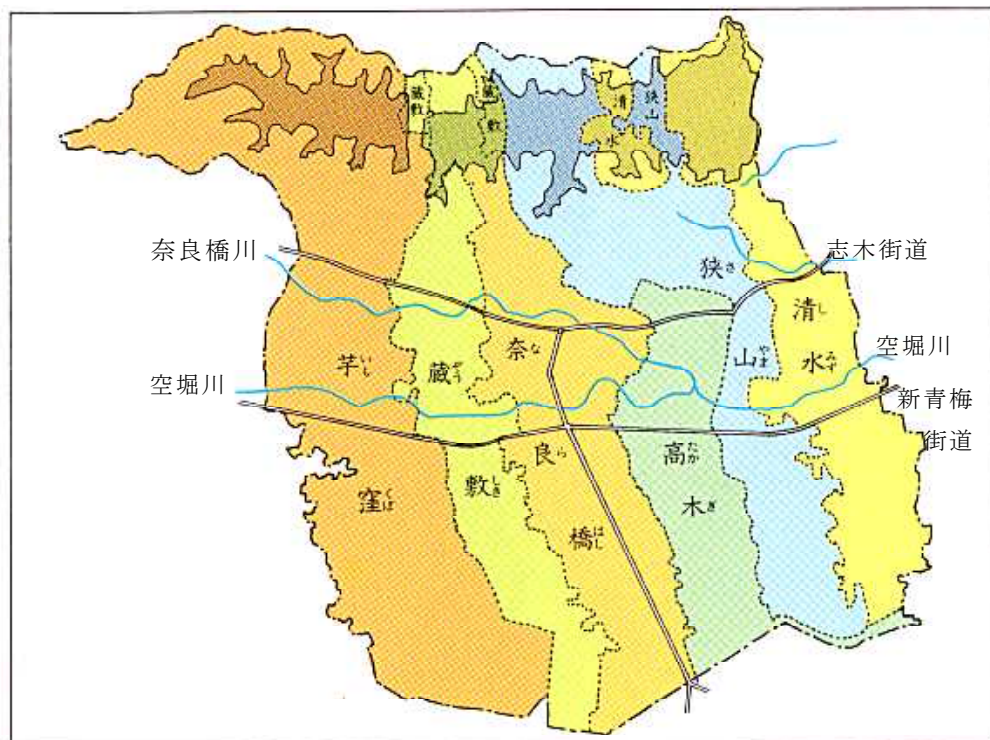
芋窪村、奈良橋村（枝郷・蔵敷村）、高木村、宅部村、後ヶ谷村、清水村

- ・正徳年中（1711－1715）蔵敷村が奈良橋村より分村

芋窪村、蔵敷村、奈良橋村、高木村、宅部村、後ヶ谷村、清水村

- ・明治8年、宅部村と後ヶ谷村が合併して狭山村となる

芋窪村、蔵敷村、奈良橋村、高木村、狭山村、清水村



(2) 谷戸の村の姿 （39・40・41）（）内数字は本資料最後の50ポイントの数字である。

- ・湧き水利用の谷戸田、畑、桑
- ・自然の地形に合わせた村落構成、曲がりのついた細路・神社、寺院、堂のセット



二つ池の源流となった湧水



かつての二つ池に祀られていた厳島大明神

都立狭山自然公園の一角に「二つ池公園」がある。そのもとに、かすかであるが金気の強い赤茶けた湧き水が出ている。これを水源として東西に並ぶ二つの用水池がつくられ、「廻田谷ッ」に囲まれ「狭山たんぼ」があった。ここにできた集落が「後ヶ谷村」の一部である。



「廻田谷ッ」にできた西武団地と東邦団地

厳島大明神の碑

厳島大明神の碑には狭山神社氏子会の、次のように説明がある。

『武蔵国多摩郡狭山の里は、上古より住人在りしが、今より約壺千二百年以前この地に田耕を行う、即ち東西に二つの池を造営し、以て用水の便に供す。古人これを狭山の二つ池と呼称し、今日に至る。往昔は其の周辺に集落ありて、神社仏閣を祭祀す。また田用水の守護神として池辺に一杵島姫命を祭祀せり。これ厳島大明神なり。たまたま慶長十二年八月十八日、未曾有右の風水害に遭遇し、家屋ごとごとく倒壊し田畑流失せり。故に往時の上の屋敷より現在の狭山の地に狭山神社と円乗院を共に移住せり。春秋幾星霜を経て、宅地造成の進展著しく・・・二つ池公園竣工を期に、この碑を建て、後世に伝える。』昭和五十三年九月三十日 狭山神社氏子会一同 撰文押本克巳

◎地図でたどる「後ヶ谷村」の村落構成

二つ池（４１）、狭山たんぼ、狭山神社（３７）、高札場所在地、円乗院（３６）、靈性庵・観音堂（３８）、貯水池に沈んだ杉本集落、杉本坂（３９）、行人塚

◎後ヶ谷村名主相給（貯水池内の集落と狭山丘陵南麓の集落にそれぞれ名主がいた）

Ⅱ 地頭と村方三役

（１）地頭 陣屋 高札場

天正１８年（１５９０）、徳川家康の江戸入府により、東大和市域の村々には、家康の家臣が下記の表のように配置された。

村 名	村 高 (石)	地 頭	知 行 高 (石)
芋久保村	３８０	酒井極之助	１７０
		酒井郷蔵	２１０
奈良橋村	３３０	石川太郎左衛門	３３０
高木村	７０	酒井極之助	３０
		酒井郷蔵	４０
清水村	３００	浅井七平	３００
後ヶ谷村	３００	溝口佐左衛門	１５０
宅部村		逸見四郎左衛門	１５０



芋窪村、高木村酒井地頭陣屋跡とされる石井家

各地頭とも、ほとんど陣屋跡は姿を残していないが、地名や道路跡などからその所在を偲ぶことができる。



例えば、奈良橋村を支配した石川地頭は現在の「東大和市立郷土館」・「八幡神社」入り口の周辺に陣屋を構え、現青梅街道はその敷地の中を通っていると云われる。画像右の「東大和市立郷土館」・「八幡神社」へ向かう道の左側に祀られる稲荷は石川地頭に関わりがあるという。後ヶ谷村、宅部村の溝口、逸見地頭の陣屋は貯水池内にあった。清水村の浅井地頭の陣屋は清水と狭山境の屋敷と呼ばれる地域が想定される。地頭は村に住み、やがて江戸に居住地が与えられると転居した。東大和に居住した地頭の墓として、次のものが伝えられる。(9・11)



奈良橋村石川地頭（雲性寺）（21）



芋窪・高木村酒井地頭（石井家）（11）

(2) 村方三役

村には、村の運営に当たる村方三役が置かれた。名主、組頭、百姓代である。長い間に、激しく変遷をしているが、その所在地は偲ぶことができる。(16)



蔵敷高札場と蔵敷村名主内野家



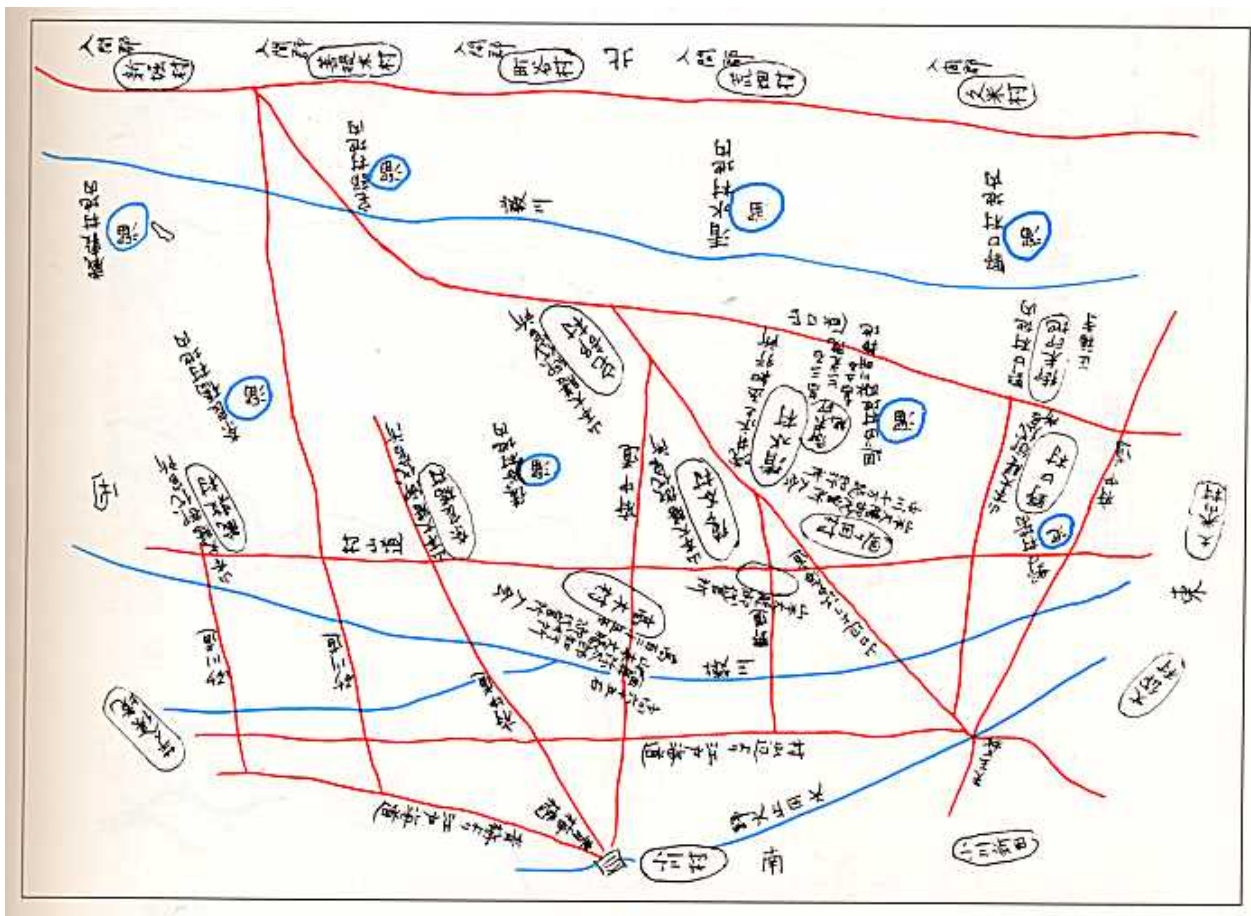
Ⅲ 古道

(1) 東大和の旧道

東大和市域の村々は生活の本拠地である狭山丘陵の谷戸と根通りに生活道があり、信仰と供養、道しるべを表す様々な装置が、現在の道に切れ切れになりながら残されている。

また、他地域の村々との交流をもたらした縦、横の広域道も形成され、やはり切れ切れになりながら残されている。

- (1) 生活の道 狭山丘陵根通りの道 村山道 志木街道
- (2) 縦の道 伝鎌倉街道 秩父道 府中道(青梅街道) 砂川道(芋窪街道)
- (3) 横の道 江戸街道(新青梅街道と東京街道) 清戸街道
- (4) 斜めの道 山口道 大山道



(天保11年(1840)の道路図(あら絵図) 東大和市史資料編9道と知名と人のくらし)



左画像は「東大和市立郷土館」・「八幡神社」入り口から北に進む道で、八幡神社の東側は「伝鎌倉街道」と伝えられ、その究明に面白い課題を残す。また、旧村山道が屈曲して残り、石川地頭陣屋

との関連が注目される。右画像は村山道（志木街道）と清戸街道の分岐点で、特に、清戸街道は高木神社がこの道に面し、清水庚申塚が三角地に残るなど、ある程度の景観がたどれる。（28）

（2）清戸街道の景観



高木神社（29）

芋窪の鹿島神社、蔵敷の各神社、奈良橋の八幡神社、狭山の狭山神社など、貯水池移転がなかった神社は、何れも谷戸に位置する。

それに比べてが、高木神社は丘陵の麓で、しかも清戸街道に正面を向けている。

江戸時代に存在した神社であり、谷戸というよりは、丘陵の南麓に発達した集落とこの神社の成立を考えると、興味ある背景が浮かんでくる。



狭山と清水の境あたりには、住宅地の中に、横に進む清戸街道と、原に進出する縦の道路との切り合いの場が残されている。

東村山市の萩山を抜けて清瀬市へ達する細路だが、江戸の発達につれ、青梅街道や江戸街道が次々とつくられる中で、生活道路と広域道路を兼ねたもので、住民にとっては便利な道であったであろう。



屈曲のある路の傍らに、現在も一部農地が残されている。

この辺は、新田開発による武蔵野開発＝新青梅街道以南とともに、住居地に沿って切り開く、「前畑」（日常生活の食料や野菜などを栽培した）を開墾した場所と言われる。江戸は遠くなり、周囲は全て住宅地となった。

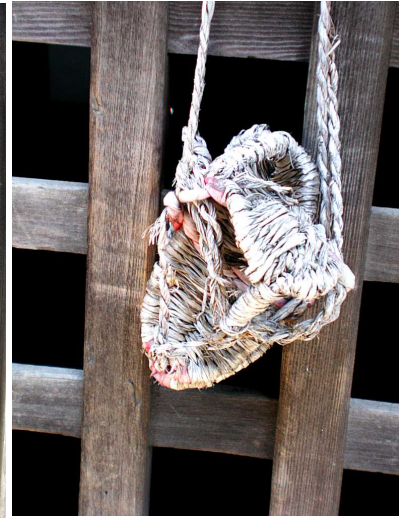
さらに清瀬方面に向かって進むと左画像のように三叉路になる。前面道路が清戸街道で左方は清水神社から来て、新堀を抜け小平市に至る。

この交差点に庚申供養塔が置かれ、覆屋がかけられて「庚申神社」となった。東大和市の中では、庚申の最も雰囲気良く残された場所である。





撮影時間の関係で庚申の部分が潰れてしまったが
近寄ってみれば、右画像のように、維持管理が行き届いている。(47)



覆屋の中には2基の庚申供養塔がお祀りされている。格子窓には絵馬とわらじが掛けられ、現在も信仰とお参りが続いていることを告げる。子供用のわらじがいじらしい。

建立年代は享保13年(1728)で、武州多摩郡山口領 清水村の宮奈戸、杉崎、野口、原、五十嵐、大久保、田口、池谷など現在にも子孫がつながる11名の方々が結願を迎えて造立したことが刻まれている。

留意すべき事は、台石右側に、「大聖山 持宝印 法印慶傳」とあり、この地の修験僧が関わっていることである。

◎地図でだどれる古道

村山道 志木街道 伝鎌倉街道 江戸街道 清戸街道

IV 信仰と道しるべ

江戸時代の東大和を求めて歩くと、道筋や寺院、個人のお宅に、こぢんまりとではあるが、多く目に付くのが信仰と道しるべの史跡である。

(1) 塚

(2) 庚申供養塔 馬頭観音供養塔 地藏 堂

(3) 講 桝倉

東大和市最古の庚申供養塔(芋窪 高杉家 延宝8年=1680)(2)



(4) 屋敷神

(1) 塚

東大和市域には、かつては諸処に塚があったことが知られている。しかし、現在ではほとんど見られなくなった。当初の姿とは変わっているが、場所と祀られた石造物がセットになって残されているものに、蔵敷の蔵敷庚申塚＝塚前庚申塚がある。(23)



場所は、第9小学校の近くで、市内の生活道でも古道に属する道筋が縦と斜めに交差する角地にある。左画像自転車の人が走る路が、青梅街道から9小へ向かう道で、左側の道は、高木から給食センターの前を通り、塚前墓地を経て現在地に達し、芋窪、武蔵村山市に通ずる。右画像は塚の上からその状況を見た。住宅が造られる前は、こんもりとした独立の塚が原の中にあった。



塚には左から順に、湯殿山大権現碑、馬頭観音供養塔、庚申供養塔、西国・坂東・秩父百箇所霊場巡拝供養塔の4つが祀られ、さらに入り口近くに、道しるべを刻んだ小片がある。

湯殿山大権現碑は高さ52センチで、表面に「奉造建湯殿山大権現 敬白」を中心にして、その右に天下太平、左に国土安全、天明2年(1782)と彫られている。左側面に、武州多摩郡蔵敷村行者 王泉坊と刻まれている。蔵敷村には太子堂の敷地内に、もう一つ出羽三山碑があり、他の村には見られないことから、この村に特有の出羽三山で修行した修験者の流れがあったのかも知れない。

馬頭観音供養塔は3段(最下段は土中)の台石、塔身の高さ94センチで、「馬頭観世音」の文字だけの彫り込みがあり、左側面に、文政8年(1825)、右側面に、蔵敷村講中と彫られている。

庚申供養塔は唐波風を模した蓋付きの塔で、高さ79センチ、正面に六臂青面金剛像を彫りだしている。

像の頭の上に「ウーン」の種字と雲と日・月、下の方に2羽の鶏、最下段に三猿が彫り出されている。右側面に明和元年(1764)惣村中、右側面に「武州多摩郡蔵敷村」とある。

西国・坂東・秩父百箇所霊場巡拝供養塔は明治28年(1895)蔵敷村内野杵左衛門、小島佐吉郎が造立したものである。

（２）庚申供養塔 馬頭観音供養塔 地藏菩薩

庚申供養塔、馬頭観音供養塔は文字を刻んだもの、像や形象を浮き彫りしたもの、大小さまざまなものが残され、注意すれば多くのところで目にすることができる。奈良橋 雲性寺の門前に、青梅街道と江戸街道の交差点にあった「庚申塚」から移されたものがあり、それによって紹介する。



雲性寺は狭山丘陵の谷戸が舌状台地をつくる先端にある。左画像はかつての姿を再現するため、周辺を写し込んでみたが、広大な駐車場になっているところを含め周辺一帯が水田であった。手前が村山道の旧道（農協の前から曲がって入る）で、そこから、水田の中を一本の参道が通っていた。（２１）

右画像、山門の前に庚申供養塔などが置かれているが、現在の新青梅街道と青梅街道の交差点にあった「庚申塚」から移設したもので、江戸時代との景観とは全く異なることに注意を要する。

馬頭観音供養塔

左下２枚の画像は雲性寺山門前に置かれる馬頭観音供養塔である。高さ９８センチ、上の方に三面



六臂の馬頭観音座像を浮き彫りにしている。その下は文字で馬頭観世音と刻んである。中央の画像は馬頭観音座像を拡大したものである。三つの顔と６本の手の上に馬がのせられ



ている。造立は左側面に寛政９年（１７９７）と彫られている。

右側面には「武州多摩郡山口領奈良橋村 施主 惣村中 施主 石川定右衛門」と銘がある。

右画像は狭山霊性庵にある馬頭観音供養塔である。この場合は二臂の馬頭観音座像が彫られている。像の上には種字があったようだが摩滅してしまった。高さ４９センチ、文化１０年（１８１３）の造立とされる。

ちなみに東大和市で最も古い馬頭観音供養塔は寛政3年（1791）とされる。奈良橋庚申塚墓地にある。文字のみが彫られている。江戸時代、東大和地方は生活の上に馬が大きな役割を持っていた。

少し時代が下がるが、文久3年（1863）、後カ谷村明細帳は

『馬持ち百姓は柴山で薪や炭をつくり、あるいは青梅・飯能・五日市・八王子などで炭薪を買い入れ、夜四つ（午後10時）頃から江戸に出かけ、朝方、お屋敷様へ納めて、その日の内に立ち戻って、夜五つ（午後8時）前後に帰ってくる』

という姿を伝えている。道中安全の願いもさることながら、農耕や運搬に力を発揮した馬は生活の基盤であり、家族の一員として扱われ、その思いが街道のそこそこに供養塔を祀らせたのであろう。像は恐ろしい忿怒の相で害するものを排除しようとしている。東大和市内の馬頭観音供養塔は19基あるとされ、内14基が文字塔である。

庚申供養塔

雲性寺山門前の石造塔の中央に置かれているのが庚申供養塔である。
東大和市内には、12基あること



が確認されている。

雲性寺に残る「ア字庚申塔」と呼ばれるもの除き、ほとんどが「村中」か「講中」の人々によって建



雲性寺ア字庚申塔



立されている。その信仰の内容も当時の社会の背景を示すものとして興味を引くが、当時の地名が明らかにされて、貴重な歴史資料となっている。

この庚申供養塔は、残念ながら、剥落が進み、彫りだした像がはっきり見えなくなってしまったが、塔身126センチで、正面に、邪鬼を踏む六臂青面金剛像を彫りだして、その上に種字「ウーン」、左右に瑞雲に日（右）月を配し、下方に2匹の鶏、3猿を浮き彫りしている。参考までに「庚申講」に使われる掛け軸の図柄をのせた。

「庚申講」は東大和市域の村々でも、「庚申待」として盛んに行われたが、その主旨を、東大和市史資料編8 信仰の姿と形では次のよう

に説明している。

『昔の暦では、年や日をあらわすのに、「えと」つまり十干・十二支の組み合わせを使っていた。庚申は「かのえさる」または、「こうしん」と読み、この庚申にあたる年や日は六十年あるいは六十日毎に巡り、くり返される。そして中国の道教思想の影響を受けて、日本でも古くからこの庚申にあたる日は、人間の体内にいと伝えられた「三尸の虫」が、その夜眠っている間に体からぬけだし、その人の悪事がすべて天帝に告げられ、そのことによって寿命がちじめられると信じられていた。そのためこの日は三尸の虫が体から抜け出さないように皆で集まり夜を明かしたという。眠気ざましのため、その夜は持ちよった茶菓や食物あるいは酒を交わし、話し明かすのが通例であった。こうした行為が庚申信仰であり、またこの集まりを「庚申講」とよんだ。・・・

右は狭山靈性庵庚申供養塔

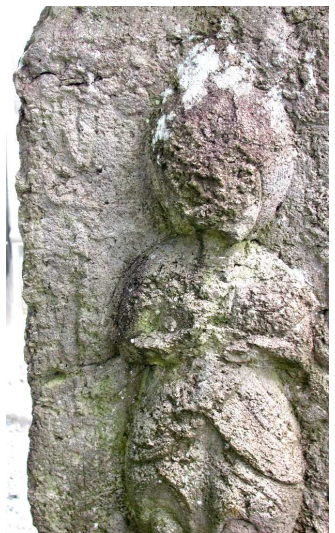


・・・以後、中世を経てますますその風習は盛んになり、とくに近世江戸時代になると全国的に各村、地域単位で信仰されるほどに流行した。本来この信仰は長寿・快樂を願うものであるが、一方で、娯楽の少なかった時代、六十日ごとに巡ってくる一種の遊び・楽しみの性格をもち、同時に地域共同体の絆、親睦を深めることが大きな目的ともなった。こうした庚申信仰は個人的なものではなく、集団で行われるのが通例で、その集まりを「講」という。』

(東大和市史資料編8 信仰の姿と形 p109)



太陽や月は庚申の日や月を表し、鶏は夜明けを告げる鶏であり、3猿は、「三尸の虫」に、見ざる、聞かざる、喋べらざるのようにもしてもらいたいとの願いという。左画像では左から口をふさぎ、耳を押さえ、目を覆っている。



庚申供養塔には、供養者と共に村名や道しるべが刻み込まれている。右画像は狭山靈性庵に保存されているものであり、すっかり摩滅しているが、像の右側に、「元禄十一年 武州多摩郡内堀村」、左側面に「庚申供養導師宅部山十五世 法印 寂如」と彫られているとされる。

元禄11年(1698)の造立で、当時、「内堀村」があり、三光院の住職が導師をつとめていることがわかり、貯水池に沈んだ村の状況を考えさせられる。

地蔵菩薩

村の人々に特に親しまれたのが地蔵菩薩であった。寺や墓地には、



奈良橋雲性寺六地蔵と観音堂

地蔵を刻んだ多くの墓石があり、六地蔵がある。

また、路傍には、伝べえ地蔵や松っこごれ地蔵など村人に何らかの御利益を約束する「お地蔵様」がお祀りされた。



狭山靈性庵の双体地蔵尊

六地藏

東大和市域の村々には、14体の六地藏が確認されている。庚申供養塔、馬頭観音供養塔ともに最古のものは1600年代に遡るが、六地藏は天保7年（1836）年が最古で、大正まで造立されている。



高木明楽寺墓地六地藏（31）



芋窪林堂墓地六地藏（12）

高木明楽寺墓地に、石造大日如来像を中にして3体が向かい合う六地藏がある。安政6年（1859）、高木村が造立したものである。

芋窪林堂墓地に、中央奥に大きな地蔵を中心にして3体が向かい合う六地藏がある。安政2年（1855）高杉家、川鍋家、内野家が施主として刻まれている。

寺院には六角柱塔に六地藏を浮き彫りにしたものがある。いずれも、明治・大正時代のものである。

右は狭山 円乗院 蓋付六面塔六地藏で、明治16年（1883）の造立である。両村世話人となっているので、狭山村と高木村の人たちが施主となったものであろう。



地藏尊

昭和45年（1970）調査の時、一般の墓として地藏像が祀られたものは、明治末年までをとらえると392体あった。これらの個人の墓とは区別されて祀られる地藏が58体ある。内、最も古いものは元禄6年（1693）とされる。比較的目にしやすい地藏尊を紹介する。

蔵敷太子堂前地藏尊（17）



蔵敷太子堂前の旧道に接するように地藏堂があり、丸彫立像の地藏尊が祀られている。高さ60センチ。台石には享保15年（1730）の銘がある。台石右側面に「海誓智観法印」と刻まれ、この

法印は太子堂に住み、太子堂でなくなったという。台石左側面には、施主として、小島五良兵衛の名が刻まれている。この一帯は小島家が多く、その一族が祀ったのであろうか。

伝兵衛地蔵（４４）



志木街道の狭山と清水の境に当たる角に祀られている。

近くの五十嵐伝兵衛の名が付けられている。江戸の中頃、五十嵐伝兵衛氏の分家の息子が行方知れずになったとき、伝兵衛氏がこの地蔵尊を祀ったら無事帰ってきたとの伝承がある。村山道が現在の形になる前は旧道に立っていたという。

松っこごれ地蔵（３３）



志木街道と南北は青梅橋から山口方面に抜ける旧道の交差するこの地（中央ガードレールのあるところ）に、かつて地蔵が祀られていた。



今は、道路改修の必要から高木神社近くの明楽寺墓地に移されて右画像のようにになっている。

注意すると建物の柵の両脇に松かさ見えるが、かつては、これを首から、腕から足まで、いっぱいにつけていた。霊験あるイボ地蔵で、お祈りに来て、願いが叶うと、お礼に松かさを供えたことによる。近在からも多くの人に信仰されていた。

造立の年号は刻まれていないが、移転先の供養碑には

『この地蔵尊は今から二百八十五年前に高木村の人達に依り志木街道の傍らに建立され・・・』と記されている。

将（勝）軍地蔵尊

東大和市域の村の地蔵尊で興味を引くのが、これまで紹介した地蔵尊とは性格を異にする「将（勝）軍地蔵尊」である。現在、蔵敷と芋窪に石造の将（勝）軍地蔵尊が残されているが、愛宕信仰と結びついて「防火・火伏せ」の願いを込めたい。



左は芋窪 慶性院に、右は蔵敷太子堂前の堂に祀られている。(3、17)

左画像は崩落が激しく馬に乗った将軍像が見えないが、蔵敷太子堂前の堂に祀られている将(勝)軍地藏尊には、馬に乗る姿が実に細部に亘ってうかがえる。

将(勝)軍地藏尊に連結する神として、愛宕大権現、愛宕大神がある。神仏習合では、この神の本地仏が将(勝)軍地藏尊であった。

新編武蔵風土記稿では、狭山村、同宅部、奈良橋村に愛宕社があったことが記録されている。以上から、神仏習合の時代、東大和市域の村々では、いずれも火伏せの神か仏を祀っていたことがわかる。しかし、それらは明治の神仏分離で分離され、愛宕社はそれぞれいずれかの神社に合祀された。今直接目にできるのは、この二つの仏だけになった。

上画像左の仏は、貯水池に沈んだ石川より移転したと伝えられる。造立年月などは不明である。右側画像の仏は、宝暦5年(1755)に造立されている。

また、勝軍地藏は戦の守護神として武将などから篤く信仰されていたとされ、庶民の間では、境の神としての塞(さえ)の神の性格も持っていることから、村々の境に祀られたのかも知れない。愛宕社はいずれも山に祀られていたとされる。

狭山の円乗院は、愛宕社を祀っていた山に寺を移したことによって、寺の山号をに愛宕山としている。愛宕社は狭山神社に祀られている。



堂

円乗院山門(36)

江戸時代、村の人々が日々の信仰の対象にした石造の仏や供養塔を紹介したが、村にはさらに、人々に素朴に親しまれた「堂」があった。寺院(慶性院、蓮華寺、雲性寺、円乗院、三光院。宗門人別帳の管理、葬式や法事、施餓鬼などを行う)の他に、村人達が集い、祈りを捧げる場である。今では様相が変わっているため、新編武蔵風土記稿、狭山の葉から整理すると、次のような堂があったことがわかる。

新編武蔵風土記稿
芋久保村 観音堂
奈良橋村 雲性寺観音堂
奈良橋村枝郷蔵舗村
太子堂
地藏堂

狭山の葉
林堂

太子堂
地藏堂

現在
林堂
雲性寺観音堂

太子堂

高木村	地藏堂	新堂（地藏尊）	
	阿弥陀堂	阿弥陀堂	
	薬師堂	蟹峰堂（薬師如来）	
後ヶ谷村	寶珠庵	寶珠山西楽庵地藏堂	
	観音堂	靈性庵観音堂	靈性庵観音堂
宅部村	阿弥陀堂	阿弥陀堂	
清水村	三光院地藏堂		
	大日堂	金剛庵大日堂	三光院五十嵐墓地内
		下の大日堂	大日堂
	観音堂	観音堂(現・清水観音堂)	
		阿弥陀堂（中堂）	三光院中堂墓地内
		塔頭堂（阿弥陀堂）	

などである。狭山の葉にはその所在の景観が描かれていて、二間・三間の堂が、道ばたや共有地に建ち、墓地があったり、独立の観音堂であったりすることを伝える。一族の長が主導し、村人達が維持管理にあたるもので、地域に密着した「お堂」として、人々のよりどころとなっていた。これまでに、多くが失われてしまっているが、数少ない現存するものを紹介する。

芋窪 林堂（12）



画像右手前の建物が公会堂で次の三角屋根（寄棟宝形造）に見えるのが林堂である。その奥は墓地になっている。狭山丘陵から少し離れた所で、曲がり道の古道に面し、「林^{はやし}」と呼ばれる地域である。ある時期、住居する南限であったかも知れない。本尊は如意輪観音で、狭山三十三観音十九番札所。明治から大正にかけて若者の勉学場所でもあった。創建年代は不明。本尊は行基菩薩の作と伝える。

蔵敷太子堂（17）



かつての村山道から蔵敷の旧道に入ると左側に、蔵敷太子堂がある。名の通り、聖徳太子を祀っている。

太子堂関係の古文書では、文化4年（1807）の太子堂普請入用が残されている。ただし、創建年代は記されて居らず、不明である。蔵敷村世話人中、蔵敷呂講中の文書があり、太子講がもたれ、維持管理には蔵敷村が当たっていたことがわかる。ここは、東大和市の史跡に指定されている。指定の説明が次のようになされている。

『東大和市史跡 蔵敷太子堂 所在 東大和市蔵敷一丁目四三六番地 指定昭和五十八年三月』

この地は、江戸時代に太子堂が置かれた場所である。『新編武蔵風土記稿』によれば、旧多摩郡山口領（東大和市、武蔵村山市、東村山市一帯及び清瀬市、小平市、立川市、瑞穂町の一部）に存在した太子堂は、寺院に付属するものを除けば、蔵敷の一堂のみであった。

また、明治五年（一八七二）の学制発布に伴い、汎衆学舎と呼ばれる蔵敷村の学校が置かれた場所でもあり、その後も蔵敷村青年団活動の拠点となった。

現在の建築物は当時の面影はないが、厨子（空殿）が安置されており、太子像が祀られている。

昭和五十八年七月 東大和市教育委員会』

なお、蔵敷地蔵堂は、新編武蔵風土記稿では『三間に五間の堂なり、南向き』として、塚前墓地にあったが、安政3年（1856）焼失して今はない。

奈良橋 雲性寺観音堂、清水 三光院観音堂（21、48）



他の堂と異なり、寺に属する堂として、奈良橋村 雲性寺（左）、清水村 三光院（右）に属する観音堂がある。狭山三十三観音霊場18番、16番札所になっている。三光院観音堂は貯水池移転により三光院と共に現在地に移転した。両堂ともに創建年代は不明である。

後ヶ谷村 霊性庵観音堂（38）

新編武蔵風土記稿に『観音堂 字 南分にあり、二間半に五間南向、如意輪の座像・・・』とある。狭山丘陵の谷の一つの先端に位置する。

江戸時代の建物は老朽により、昭和38年に解体し、小さな坊舎が建てられていた。それも老朽化したため、平成9年6月7日、再建・新築された。

創建年代は、その供養碑に

『・・・開創された年代は詳かでないが、円乗院第二



十二世法印竜譽が木造如意輪観音像の台座に「元禄五壬申九月三日・・・」と誌されていることから、庵の創建はこれ以前であることが伺える。・・・』

としているので、元禄5年（1692）が基点になる。狭山三十三観音霊場17番札所になっている。

◎高木村の地藏堂、阿弥陀堂、薬師堂＝蟹峰堂（薬師如来）については不明。

清水村観音堂 （42）



村山道（志木街道）から貯水池へ上がる角に清水村の観音堂がある。消防団詰め所の裏側に、いかにも江戸時代の観音堂らしい姿で今もある。

新編武蔵風土記稿は『見捨地一畝、村の中央道の傍らにあり・・・村持ち・・・』といい、狭山の葉は『橋場にあり。草創開基不詳。本尊聖観世音菩薩は行基の作にして長一尺五寸の立像。狭山十五番の霊場、杉崎氏の持也』とあるように、橋のたもとにあり、村の人々の管理運営である。昭和30年代まで茅葺き屋根で、街道の角によく似合った。



札所巡礼の場合、東村山方面から東大和にはいると、東大和市では、第一番で、次は貯水池に沈んだ三光院観音堂←→狭山霊性庵←→雲性寺観音堂←→芋窪林堂へと順路が決まっていた。そのルートを現在の道でたどっても、いかにも江戸時代的である。

次の三光院観音堂への道は、すぐ北側にある前川の橋を渡った。その橋と石橋供養塔があり、東大和市の郷土資料に指定されている。（昭和55年）説明版には次のように書いてある。（42）

『この供養塔は、方柱形石碑で、天保四年（一八三三）前川に石橋をかけた際建立されたもので、



現存する供養塔の内同一場所に存する唯一のものである。

供養塔は橋の構築と長期の保存を願いさらには迷いの世界から悟りの世界へ人々を「渡す」という仏の教えにちなんで建てられたものである。当時の民間信仰の一端を示すものとして貴重である。

昭和五十六年三月 東大和市教育委員会』

この近くに「的場」と呼ばれる屋号を持つ家があり、さらに旧道をたどると「屋敷」という地名も残る。的場が弓の練習場であり、屋敷が陣屋と関連付けられ、いまだにはっきりしない清水村地頭の陣屋の所在を探る道が開けるかも知れない。なお、観音堂には多くの石塔が集められて、保存場所にもなっている。

清水大日堂（４５）

清水には大日堂が二つある。一つは西武多摩湖線武蔵大和駅近くで、左の画像のような堂と胎藏界の大日如来像（石造、座禅の姿で印を結ぶ）が祀られている。



新編武蔵風土記稿には「・・・村の中央にして北よりなり、堂二間に二間半南向き・・・」と記されたものである。従って、江戸時代から現在地にあったことになる。狭山の葉はさらに、『下の大日堂は原口にあり。・・・銘に正徳二年（１７１２）壬辰三月大光山本山修験持寶院とあり。境内村民及び大久保家の墓あり・・・』とする。

もう一つは三光院墓地（五十嵐墓地）にある。新編武蔵風土記稿には記載がなく、狭山の葉に「金剛庵大日堂は狭山岑にあり。本尊金剛界石仏極彩色の大日如来は長一尺五寸・・・」と記されている。金剛界の大日如来として、胸の所で印を結ぶ。

貯水池の中にあったことから、三光院と共に移転した。堂は「維新の際廃す」として、明治になって廃されていたが現在は右画像のように新しく堂がつけられている。墓地に祀られる大日如来は数多い（約７０体）が、堂に祀られる大日如来は、東大和市ではこの二つだけである。（４８）



なぜ、清水だけに大日堂があるのか、蔵敷だけに太子堂があるのか、その地域性や背景が検討課題となろう。

修験

武蔵大和駅に近い「下の大日堂」の墓地には、大久保家と「修験・持寶院」に関わる墓石があり、大久保狭南の碑がある。(45)



狭山の栞によれば、狭南の『先祖大久保掃部は武家にして江戸の人なり。服飾して本山修験となる。』としている。

狭南は文をよくし、郷里の名勝地を紹介する『狭山八景』を著した。

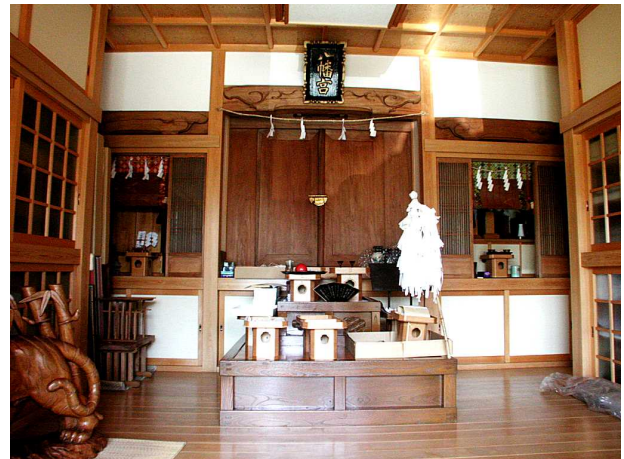
東大和市には、修験道寺院として

清水村 圓達院 持寶院

宅部村 常覚院

奈良橋村 覚寶院 大徳院

があった。修験の道場であり、加持祈祷の場でもあったと考えられている。現在では、唯一、奈良橋村 覚寶院の護摩堂が奈良橋八幡神社神職 押本家に残されている。(22)



左画像が護摩堂の建物で、内部には妙見菩薩、不動明王が祀られ、護摩壇、ホラ貝、金剛杖などが保存されている。覚寶院は奈良橋村の八幡宮、山王社の別当寺であった。

同じように、宅部村の常覚院は愛宕神社と御霊(料)神社の別当を務めた。愛宕神社と御霊(料)神社は貯水池移転により狭山神社に合祀されている。

東大和市域の村々の修験は聖護院・本山派に属し、堂を持ち、村人達の求めに応じ、まじないや加持祈祷など呪術的宗教活動を行った。

村では、修験者の先達により、富士山、出羽三山などの霊山へ「講」による登拝が行われた。蔵敷太子堂には出羽三山供養塔(右)が残され、蔵敷庚申塚には、湯殿山供養塔(左)がある。



修験道は明治政府によって廃止されて、天台宗か真言宗の所属になった。このときに修験者は神職になったり、時には帰農した。

清水村阿弥陀堂（４８）

村の人達には阿弥陀信仰も浸透していた。本尊に阿弥陀如来を祀る阿弥陀堂は高木村、宅部村、清水村にあった。その後衰え、現在見られるのは、三光院中堂墓地に残された阿弥陀堂だけである。

新編武蔵風土記稿には高木村と宅部村に阿弥陀堂の存在が記載されているが、狭山の葉には、さらに「中堂」が記載されている。今は貯水池に沈んだが、宅部（狭山内宅部郷内堀）の阿弥陀堂と清水村の塔頭堂（本尊阿弥陀如来）の中間に阿弥陀堂があつて、これを「中堂」と呼んだと記載されている。



この「中堂」が清水三光院中堂墓地に移されている。本尊阿弥陀如来がお祀りされている。寛政４年（１７９２）２月８日焼失し、その年１１月に再建したとの記録がある。従って創建年代はそれ以前となる。

（３）講 梔倉

純農村であつた東大和市域の村々には、多くの「講」ができた。豊作を願い、雹害を除け、天災・人災を防ぐために、神社仏閣への願ひが必要であつた。全ての村人が参拝することは、経済的にも農業日程からも不可能であつた。そこで、村人達が集まって、経費を分担し、回り持ちで代参をする制度ができた。

御獄講、戸隠講、榛名講、富士講、大山講、成田講、庚申講、観音講、地藏講、念仏講、稻荷講、伊勢講など様々である。

講には、神職が出向いて来て、講中の村人と共に祈りを捧げることもあつた。代参の場合は、代参者が帰村すると、講中にお札やお守りが分配された。

それらの時には講中の人々が集まって飲食をした。そのことも含め、結婚や葬儀の「人寄せ」がある場合に対処して、必要な座布団や食器を共同で整える仕組みがあつた。その時の食器を収納したのが梔倉である。



昭和２０年代までは、結構使われていたが、今ではほとんどなくなった。右画像は僅かに残されている蔵敷村の小島一族の梔倉である。太子堂への道筋にある。（１７）

（４）屋敷神

村人達は神社や寺院・堂を祈りの場としたが、その家の守護神を「屋敷神」として祀った。昭和５７年から５年間かけて、道グループが、東大和市の屋敷神を調査した結果は、３４１の「屋敷神」が

あった。種類別に多いものからあげると、

稲荷 233、弁財天 17、御魂霊神 12、八幡宮 10、山の神 10、水の神 6、井戸の神 4、熊野神社 4、金山神社 3、諏訪神社 3、荒神 3、庚申塔 3、御獄神社 3 など。

以上で 311 社を占めるが、他の 30 社は 25 種類の神々が祀られている（内 板碑 2 不詳 1）。

これらの神々は、現在も各屋敷で丁重にその家の伝統をもって祀られている。右画像は芋窪石井家の稲荷。芋窪・高木を治めた酒井地頭の陣屋の跡に住む「石井権右衛門」が明治 12 年にお祀りした。（9）



V 騒動と農兵

（1）天明の打ち壊し

天明 3 年（1783）から 4 年にかけて、狭山丘陵周辺の村々は天候不順、当時の社会的背景から飢饉によって飢餓に苦しみ、困窮する人々が激増した。

天明 4 年（1784）2 月 28 日夜、瑞穂町・箱根ヶ崎の狭山池に周辺の農民が集まって（2～3 万人との説がある）、武蔵村山市～東大和市へと進み、中藤村の豪商「山王前」やその関連の家を打ち壊し、高木村の庄兵衛家をおそって 29 日朝、解散するという事件が起こった。打ち壊されたのは 5 軒で、中藤、高木村名主および中藤村百姓代が含まれていた。



その背景には、在方商人による買い占め、売り惜しみが動機となり、農民との対立が起こり、一挙に爆発したものと考えられている。

この事件の特徴は、打ち壊しの主導者が名主であり、被害者が名主と百姓代であったこと、一揆にまでいならず、打ち壊しに終わったところに、狭山丘陵周辺の村々の社会・経済的、政治的実態がうかがえることである。



高木村名主宅跡と井戸跡（35）

（2）農兵訓練場

幕末の開港以来、内外の緊張は高まり、関東の社会情勢は切迫してきた。「浮浪人、賊徒」と呼ばれる者達が村を徘徊するようになった。飢饉が重なり、一揆の気配も高まった。

文久 3 年（1863）8 月、幕府は幕府領での農兵取り立てを決定した。東大和市周辺では、同年 11 月、江川太郎左衛門（英龍の子供の英武）から、支配の村々に「口達書」「隊伍仕法」などが通達され、農兵取立の廻状がきた。農民の壮年強健の者を農兵に指定、農業を営む間に軍事訓練、有事には兵卒として動員する。という趣旨のものであった。

農兵に任命された者は、ほとんどが名主、年寄り、組頭とその倅達であった。

東大和の村々の農兵（文久3年）は

後ヶ谷村	名主	28歳	百姓28歳
宅部村	組頭倅	25歳	
高木村	組頭倅	36歳	
奈良橋村	名主倅	31歳	
蔵敷村	百姓倅	37歳	百姓倅20歳

であった。後ヶ谷村の名主は隊頭取であった。蔵敷の名主内野左衛門が世話役になり、蔵敷に射撃場が作られて、射撃の訓練が行われた。その調練場跡が残されている。



蔵敷農兵調練場跡（25）

VI 村の連合⇒大和村への胎動

高木他五ヵ村連合戸長役場跡

御一新

徳川時代は明治維新によって終わり、時代は新しくなった。政府は慶応4年（1868）閏4月、政体書を制定し、地方支配機構を定めた。

- ・全国を府・藩・県に分け、府県に府知事（知府事）、藩に藩知事（知藩事）、県に県知事（知県事）を置いた。
- ・「府」は東京、奈良、大阪、長崎、京都、函館、越後、甲斐、^{わたらい}度会など幕府の重要直轄地
- ・「県」は政府に没収された幕府直轄領や旗本知行地
- ・「藩」は旧大名が支配する藩がそのまま置かれた。

東大和地域

⑦代官支配地が菰山県

①旗本領は没収されて、品川県になった。その結果

①蔵敷村、奈良橋村、宅部村、後ヶ谷村は菰山県

②高木村、芋久保村は、旧旗本領が品川県、旧天領が菰山県

③清水村は新田分が菰山県、本田分が品川県

の所属となった。「県」といっても、現在の地方自治体の「県」ではない。村の組織も、名主、組頭、百姓代がそのまま残り、従前と変わりがなかった。



菰山県印

図説東村山市史 p 139

狭山村の成立

明治6年（1873）、地租改正条例が發布されて、土地の調査を行い、土地一筆ごとに地番を付けることになった。後ヶ谷村は狭山丘陵の南麓と貯水池の湖底地域で構成され、宅部村は

貯水池の湖底の区域のみであったが、人口増加による分家や開発の関係から隣接していた両村間に複雑な入り込みが生じていた。その状況は、新しい地番を付けるにはひどすぎて、

「両村を一ヵ村として、整理された地番を設定する問題が起こってきた。明治8年2月25日、両村の小前一同は、熟談の上、連印をもって、両村を廃止し、新たに狭山村を設ける改称合併願いを十一大区十小区会所に出願した。翌3月、神奈川県令はこれを許可し、ここに後ヶ谷・宅部の二村は解消して、狭山村が成立したのである。」（大和町史 p 317）

これで、東大和市域には清水村、狭山村、高木村、奈良橋村、蔵敷村、芋窪村が並ぶことになった。

広域の合理化策（連合戸長制）

新しい村々に村議会が構成され、地方自治の産声が聞こえはじめたが、その実態は財政困難に喘ぎ、とうてい自立ができる状態ではなかった。政府は、明治17年（1884）、合理化策として、村々が集まって共同処理をする、連合戸長制度をとることにした。

- ・同年7月、芋窪、蔵敷、奈良橋、高木、狭山、清水の村々が「連合村」を構成した。
- ・戸長は狭山村の関田糸右衛門が選ばれ、高木村の明楽寺に「連合戸長役場」を置いた。その跡が高木神社の境内に残されている。



明楽寺の会所跡（建て替え）（32）



倉庫（当時のまま）

VII 歩けば探せる50ポイント

東大和市の江戸時代は、ていねいに探すとまだまだ目にすることができる。地域ごとにたどると新しい発見がある。

① 芋窪街道 所沢宿から日野宿への道 芋窪新田への道

② 市内最古の庚申塔（36）

③ 慶性院（35）観音堂 水天像



慶性院本堂



水天像



最古の庚申塔

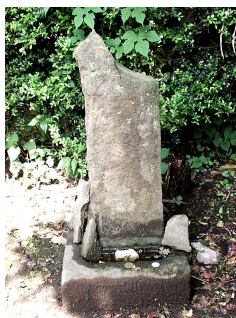


芋窪街道 森は蓮華寺

④ 住吉神社（34）（牛頭天王）



雷大明神



神明社



弁財天



⑤ 四ッ街道の馬頭観音（33＝横街道と芋窪街道の交差点）

⑥ 蓮華寺（31）



⑦ 要石（32）



四ッ街道



⑧ 豊鹿島神社（29）白山神社 日吉神社 稲荷神社 愛宕神社

滝沢明神社 九頭龍神石碑 奥の宮 日待灯籠（正保4年＝1647）

四ッ街道の馬頭観音

豊鹿島神社



明治の学校跡、自由民権・集会の場



⑨ 芋窪村・高木村地頭（酒井氏）陣屋跡

⑩ 笠松峠（狭山丘陵南麓の集落と貯水池内石川集落の結節点）地藏・みちしるべ（明治15年）



⑪ 芋窪村・高木村地頭墓（杉山＝林山から移設）

⑫ 林堂（芋窪観音堂）（30）六十六部供養塔（名和2年＝1765）

六地藏（安政2年＝1855）

⑬ 光明真言一千二百万遍供養塔（24）

- ⑭ 熊野神社（21）力石
- ⑮ 巖島神社（23）
- ⑯ 蔵敷高札場（22）、蔵敷村名主・里正日記
- ⑰ 蔵敷太子堂跡（20）將軍地蔵 出羽三山
供養塔（月山・羽黒山・湯殿山）
石原伴鳳碑 小島家椀倉
- ⑱ 御獄神社（19）
- ⑲ 奈良橋村地頭陣屋（石川氏）所在地
旧村山道
- ⑳ 八幡神社（18）富士浅間社 疱瘡神
伝鎌倉街道

巖島神社 明真言一千二百万遍供養塔



八幡神社への道（伝旧鎌倉街道）

八幡神社

富士浅間社

- 21 雲性寺（15）石川地頭墓 観音堂
六地蔵（天保7年＝1836、嘉永7年＝1854）
- 22 八幡神社神職押元家 護摩堂（覚宝院）
- 23 蔵敷庚申塚（25）湯殿山供養塔（天明2年＝1782）
- 24 塚前墓地（26）六地蔵（天保15年＝1844、安政2年＝1855）
- 25 蔵敷調練場跡（27）日枝神社
- 26 鎌田家墓（自由民権運動家）
- 27 札の辻（奈良橋高札場）



28 清戸街道分岐点 札の辻

清戸街道分岐点

- 29 高木神社（尉殿権現＝13）塩竈神社（14）八坂神社 秋葉神社 稲荷社 山神社
- 30 江戸街道と府中道（現府中街道ではない）の交差場所にあった馬頭観音 庚申塔
- 31 明楽寺墓地 六地蔵（安政6年＝1859）木食上人伝承
- 32 高木他五ヵ村連合戸長役場跡＝江戸から明治へ（12）
- 33 松っこごれ地蔵（いぼ地蔵）（11）
- 34 笠森稲荷（10）

35 宮鍋家（高木村名主、天明の打ち壊し）

36 円乗院（9）自由民権・集会の場

37 狭山神社（7）（神明社・御霊社・愛宕社）、山の神社、稲荷社



狭山神社の前には高札場があり、百たたきの刑が行われたのと言い伝えがある。

38 霊性庵（8）観音堂 六地藏（文久元年＝1861）

39 杉本坂（行人塚・狭山丘陵南麓の集落と貯水池内集落（杉本）の結節点）

40 前川の源流⇒久米川宿へ

41 二つ池・めぐりたたんぼ・廻り田谷つ遺跡

42 清水石橋供養塔、清水観音堂（1）屋敷・的場の地名

43 成就院所在地（清水村地頭墓所）

44 伝兵衛地藏（6）

45 大日堂（大日如来に持宝院名を刻）大久保狭南墓誌

46 清水神社（2）稲荷社 愛宕社 地藏菩薩

47 庚申神社、庚申塔（3）お庚申通り＝清戸街道（奈良橋から清瀬市へ）

48 三光院（4）観音堂 大日堂 阿弥陀堂 名号塔婆（5）

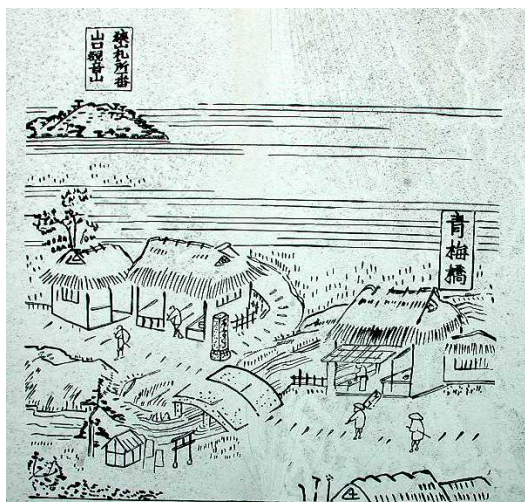
49 青梅街道（現桜街道）・青梅橋跡（39）

50 野火止用水



名号塔婆

「南無阿弥陀仏」の念仏が彫り込まれている。



東大和駅一帯は画像左のような野火止用水と青梅街道が交差するところで、青梅橋が架けられていた。左下隅に稲荷が祀られていて、東大和市駅高架の近くに移転していたが、今ではなくなってしまった。左端画像は現地に保存されている青梅橋の橋脚である。

（）内数字は「ひがしやまと文化財ガイド」（東大和市教育委員会）の番号

「ひがしやまと文化財ガイド」に記載されているが今回案内図に記載しない江戸時代以外の文化財
東大和市立郷土博物館（16）八幡谷戸遺跡（17）鹿島台遺跡（28）旧日立航空機（株）変電所（37）爆撃の痕跡の残る給水塔（38）